

妻の日記、俺の知らない夜だけ 字が乱れる

読まれると知りながら書き続ける夫婦の日記——妻の頁に
だけ、年下の男の影が濃くなっていく

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

彼女はただそこにあるが、いつもとは違う重みを持った何かを含んでいた。

梅雨空の下、古びた和室の畳が湿気を吸って微かに膨らむ音が響く中、律子は机に向かい、黒鉛筆を紙面へと沈ませている。その姿は一見すると、四十八年という年月で磨耗されたような、淑やかで平穏な日常そのものだが、圭介には僅かな違和感が脳裏に刻まれている。夫が玄関を開ける足音を聞かされるまで、彼女は自分の存在をどこか別の時空で生きているように見えた。

圭介が静まり返った部屋に足を踏み入れ、妻の後を追うように座る。

「まだか……」

彼の低い声が部屋の奥から這い出る。律子は手を止めず、視線だけは少しだけ下がり、濡れた髪が首筋を伝うようにして垂れ下がっている。彼らは互いの呼吸が混ざるほど近くにいるのに、言葉にするのが惜しそうだった。それは、普段から日記を書く習慣がある彼女特有の倦怠感であり、誰にも読まれぬよう努める割に、まるで誰かに見られているかのような緊張感だ。

圭介は妻の横顔を掠めながら、スマホの画面を覗き込む。

『既読スルー』。

夫が帰宅してから十分経ち、妻のスマホは通知欄に溜まっている既読の状態では眠っていた。それに対し、彼女の手握られた黒鉛筆は紙面を食い込み、湿気の多いこの季節特有的な粘り気を放つような墨跡を残していく。夫はその不自然な静寂と、机の上に残された冷たいペン先、そして妻の指先に触れる温度差を感じ取った。

「今日は何書いたんだ？」

圭介が尋ねると、律子は鉛筆を持ち上げ、空の頁へと軽く擦り付ける仕草をした。その動作には、何かが漏れ出し、かと思うほどの滲み出しがある。

「ふふっ、いつものことさ」

彼女はそう笑いながら、視線を圭介に向けた瞬間、そこには一層の深みがあった。伏し目がちな切れ長の瞳からは、何かを探るような鋭い光が宿っているようにも見えたが、すぐにまた霧のように薄れていく。

「君もまた、日記を読もうとする気まぐれで」

彼女が呟く声は、梅雨特有の高い湿度に溶け込んでいくような、透き通るもののようだった。圭介は妻の手を取り、その温もりを確認する。普段なら冷たくて滑らかな肌

だが、今日は微かに熱を持っている。それは単なる体温ではなく、内側から鼓動しているかのような灼熱感だ。

二人の間では、古くからの慣習のような距離感が張り詰めていた。夫が帰宅すると、必ず妻は自分の日記を広げ、そこに書き込んだ物語の世界へ没頭してしまう。そして夫が読み返すと、そこには自分自身よりも、あるいはそれ以上の誰かの影が見え隠れしているのだ。

「年下の男……って、どこにそんなものを見つけたんだ？」

圭介が自嘲気味に口を開く。妻の机の下や引き出しの中に、ふとした拍子に見つかる白い手紙や、匂いの異なる香水の痕跡。あれらはすべて、彼ら夫婦という確固たる境界を侵食していく小さな穴だった。律子はそれを無難な言葉で片付けようとし、鉛筆で頁の端々を書き添えていく。まるで、そこにある黒いインクの染みを消そうとするようにも見えるが、実際にはむしろそれを強調するように余計な線を引いていた。

圭介は再びスマホの画面に触れると、通知音がまた鳴った。

『既読』。

妻はその音にも気づかず、自分の世界へと没入してしまっていた。それはある意味、最も濃厚な夜の予感を秘めた状

態だ。二人とも互いの存在が重なり合うことを恐れており、読まれることへの焦燥と、誰かに見られたいという渴望の間で揺れている。

「――」

律子が深く息を吐くと、その吐息が圭介の頬を撫でるような感覚だった。彼女は突然、鉛筆を止めて圭介の方へ視線を回す。その一瞬、部屋の空気が一変した。梅雨の湿気よりも濃い何かが生氣に満ちているようだ。

「君のあの瞳……今日は何を見させてんだい？」

彼女が問いかける声は、日記の中だけ雄弁になる彼女の口調とは異なり、少しだけ硬く、そして鋭かった。圭介は妻の唇の動きを追う。普段なら淑やかで緩やかな口の運びだが、今は微かに震えている。それは言葉にしようとしている内容の多さからくる、あるいは抑え込めない情感からだ。

圭介は妻の肩に手を置き、ゆっくりと圧力を加える。

「重いね」

そう言いながら、彼は妻の髪を優しく掬い上げ、そこにある黒髪の艶に触れた。指先が通った瞬間、律子は小さなくだり声を漏らした。その感触は、絹のように滑らかでありながら、生きている肉体の躍動感を含んでいた。

「いつもの重みじゃないのに」

律子自身もそれを自覚しているようだった。夫の手が自分の肌から離れるたびに、皮膚が火傷されたような感覚が残る。彼らは互いに読まれていることに気づいており、それゆえに言葉が窮屈になってしまっているのだ。日記という媒体を通じ、二人とも同時に二つの世界で生きているような錯覚を誘発していた。

圭介が再び視線をスマホへ向けると、未だに溜まっている既読の通知が目に残る。

『既読』。

妻はその存在を完全に無視し、机の上の白紙の頁へと意識を戻す。彼女にとって現実とは、その白い紙面こそが真実なのかもしれない。そこに描かれる物語が、この湿っぽい部屋での二人の実体よりも鮮明に映っている。

「君、また考え事してない？」

圭介の問いかけに対する律子の返事は、鉛筆を紙面に押し付ける音だけで代わった。

「ん……そういえば」

彼女は顔を上げ、窓の外に垂れ込めた灰色の空を見た。雨粒が引き戸を叩くリズムは、まるで二人の鼓動が同期しようとしているかのような合図のように響いている。その音が、部屋の静寂を引き裂きつつも、かといって完全には破壊しないほど巧みに混ざり合っていた。

圭介は妻の指先がペンを握る仕草を細かく観察する。人差し指と中指の間から滲み出る墨の跡。それは彼女の精神状態を視覚化しているかのようなものだった。

「梅雨ね。湿度が高くて、何かが溶け出しそうで」

律子が頷くと、自分の首筋に触れる濡れた髪を取り除こうとする手つきを見せた。しかし、その髪はまたすぐに肩へ舞い降りていく。彼女はそれを気にせず、日記に『湿度・高』と簡略的に書き込んだような、実用主義的でありながら詩的な感性を持っていた。

「あの日からのことさ」

律子が一息入れて呟いた。彼らの関係性に変化があったのは数週間前だ。圭介が仕事で遅くなり、帰ってきた時、妻は玄関で立ち止まり、夫の靴音に耳を澄ませていた。それからというもの、夫は妻の視線がどこに向いているのか、常に疑心暗鬼になってしまっているのだ。

「君、僕たち誰より長く付き合ってるのに」

圭介が苦笑いを浮かべる。それは背徳感ではなく、二人の関係にある隙間に対する、愛と困惑が入り混じった表情だった。律子は夫の手を握り返し、その手のひら紋様を読み解くかのように触れている。

「日記の中で、僕たちが一番親密になる日なんだよ」

彼女がそう言うのと、圭介には確かにそんな気がする瞬間があった。紙面の上では、彼らは言葉を選ばず、感情をぶつけ合い、時に過剰なまでに表現し合う。しかし現実では、そこは冷たい理性と、読まれることに怯える緊張感だけが残されている。

圭介が再びスマホを操作すると、新しいメッセージが届き、妻の既読マークが点滅した。

『既読』。

律子はその光景に気づかず、自分の描いた文字の端々を整えようとしていた。彼女の集中力は異常なものであり、それゆえに周囲の音が遠ざかって聞こえてくるようにも思えた。

「――」

律子が口を開き、声に出して呟く言葉を圭介は聞き取ろうとした。それはまるで、日記というフィルターを通して世界を見ているかのようだ。実体のない何かを抱きしめようとするような仕草で、彼女は圭介の胸元に顔を埋めた。

その触感は、冷たくて滑らかでありながら、激しく鼓動しているかのようだった。

「君……また何か隠してる？」

圭介が問うと、律子は鉛筆を咥え込み、息遣いに混じって呶り叫ぶようにも見える。

「ふん……いつものことだもの」

彼女がそう答え、再び頁へと視線を落とした。圭介は妻の背中に沿い、二人の体温が交錯するのを確かめる。それは行為そのものではなく、互いの存在を感じるための、細密画のような接触だ。雨音が窓ガラスを伝い、室内の空気をさらに湿らせていく。

圭介は妻の耳元へ行き、そこに残った微かな香水の匂いを嗅ぎ分けた。それは普段使っているフローラル調とは異なり、わずかに甘酸っぱさを帯びた、夜に誘われるような香りだった。

「梅雨が心地よくね」

律子が頷くと、彼女の唇が紙面を濡らす音を立てた。インクのように滲み出しそうな口紅の色。

「君の視線、重いよ」

圭介は妻の手から鉛筆を受け取り、自分の日記を開いて見せる仕草をしたが、中身はまだ半分以上白紙のままだった。彼らがまるで誰かの日記を読み返すかのように、自らの過去と現在を重ね合わせようとしているのだ。

「――」

律子が息を呑む。圭介の指先が彼女の喉元に触れる感触が、冷たい風でもかき消すように伝わってくる。

「読まれても構わない……ってこと？」

彼女が問いかける声は、部屋中の湿度によってぼやけてしまい、実体のない響きに聞こえた。圭介はその声を飲み込みながら、妻の黒髪が肩を覆う姿を一瞥した。

「夜が更けるまで、このまま読んであげよう」

圭介そう呟くと、二人は再び言葉を越えた静寂へ沈んでいった。その空間には、最も濃厚な夜の予感が満ち溢れ、読み手である夫自身さえ、自分が物語の一部に組み込まれていることに気づかず、頁をめくることに没頭していた。



——ここから先は製品版でお楽しみください——